

# 昨今話題になることが多い、プロジェクションマッピング

【内田 照久 (専門分野: プロジェクションマッピング)】

FellowLink 倶楽部 2014/12/01 #17 に寄稿

私は、プロジェクションマッピングをテクニカルの側面からサポートする仕事としています。最近では「マッピングプロデュース」とか「テクニカルプロデュース」などと呼ばれたりしますが、プロジェクションマッピングにおける技術プラットフォーム（プロジェクターの狙い方から映像制作フォーマットまで）を作成して、現場でのテクニカルオペレーションまでを指揮する立場にあります。

そもそも、「プロジェクションマッピング」という呼び方が一般化したのは2010年頃からです。

プロジェクターの技術が進化して動画を高精細高出力で容易に投影できるようになったこと、CG製作の技術がより容易になってきたという、ハードとソフトの技術進化という二つの要因により、開花しました。

この2つの進化は、よりセンセーショナルなイメージを人々に与えることが出来るようになり、同時多発的に世界中に「プロジェクションマッピング」の市場を広げていきました。

それまで、大型の映像を建物などに投影するような技術はかなり敷居の高いもので、元々はオペラなどの背景で使うようなスライドプロジェクターの技術から始まっています。それを大型の建物やオリンピックなどの大型イベントのオープニングなどで用いる技術は1990年代から、フランスで発展しました。

私も2002年より、フランスのPIGI（ピジー）という大型スライドフィルムプロジェクターを扱う代理店としてこの仕事をスタートさせ、コンサートの背景や大型コンベンションのオープニング映像などを扱うことを10年以上、生業としてまいりました。

しかしながら、日本においては、この大型映像発展期である1992年から2012年は失われた20年と呼ばれる経済の低迷時代と符合します。ヨーロッパなどに比べると、大型イベント自体が少なかったですし、自治体等がイベント映像にお金を出すこと自体批判されてしまうような風潮もありました。この点では完全に遅れをとってしまっていて、大型映像をイベントで行うこと自体が日本では完全な隙間産業状態でありました。

大型のイベントにおいても、要求する台数や映像の大きさが満額回答してもらえないようなことは皆無で、何度となく苦汁をなめてきました。

その失われた20年からの脱却を象徴するようイベントが、2012年9月、東京駅駅舎復元を記念して実施された「TOKYO STATION VISION」でした。技術的要求が全て満額回答を頂くことができ、思う存分技術力を発揮させることが出来ました。当時、日本国内で20000ルーメンの高出力プロジェクターを46台集めること自体不可能であったため、うち20台はアメリカから借りています。

このマッピングの成功により、日本でも海外に劣ることの無いプロジェクションマッピングが出来ることを国内外に証明できたと思っています。

プロジェクションマッピングは完全に認知され、私と同じようなマッピングを生業とする業者の方も増えました。これは喜ばしいことです。ようやく、常にフランスのお尻ばかりを追いかけてきた20年から、これからは日本独自の発展が期待できると思っています。

今後、失われた20年から完全に脱却して、2020東京オリンピックに向けて我々の業界も日本発信の発展がしていけるよう、一つの支えになっていければと思っています。

【参考】 [イベント映像演出の世界] Vol.07 プロジェクションマッピングイベントにブームの火をつけた「TOKYO STATION VISION」の裏側を探る、PRONNEWS、2014-10-24  
<http://www.pronews.jp/column/20141024110044.htm>